風見幽香に転生した私は平和を愛している……けど争い事は絶えない（泣）

朱雀★☆

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある時気がついたら〝風見幽香〟になっていた彼女。

様々なトラブルや勘違いをされながらも彼女は懸命に生きていく。

ドＳで嗜虐的な『風見幽香』とは違い、彼女は平和と穏やかな時間を愛する平和主義者。これは本当の『風見幽香』とは違う物語。

注意点

『性格改変』

『原作改変』

『独自解釈』『独自設定』が含まれています。

これを踏まえて読むことをお願いします。

良かったら感想・評価お待ちしています。

目次

第一章『吸血鬼異変』
第一話・面倒事を断れない私 ―― 1
第二話・門番の意地 ―― 6
第三話・動かない大図書館にご挨拶（ゆうかりんスマイル） 12
第四話・吸血鬼と花妖怪 ―― 19
第五話・八雲藍は思う ―― 26
第二章『寂しい少女と恐れられる花妖怪』
第一話・友達がすくない事に最近気づいた今日この頃…… ―― 33
第二話・魔理沙と弾幕ごっこ（改稿版） ―― 42
第三話・寂しがり屋な花妖怪とわんぱくな氷の妖精 ―― 51

第一章『吸血鬼異変』

第一話・面倒事を断れない私

おはよう、それともこんばんはかな？

私の名前は　風見幽香っていうの。

東方ｐｒｏｊｅｃｔに出てくるキャラの一人で、二つ名は四季のフラワーマスター。

純粋な妖力と身体能力で大妖怪とまで言われた存在。それが私。

先程、私は自己紹介したけど実はちょっと違うんだ。私の〝肉体は〟風見幽香。けれど、その器に入っている魂が、日本で平和に暮らしていた女子高生である、私なのだ。

意味がわからないという人、私もよくわかっていないから安心して。

だって、気づいたら花畑で寝ていたんだよ？　それ以外の説明は出来ないのは仕方ないと思う。

目覚めたらその場所に私は存在していた。脈絡もなく、突然に。

それと、何故か前の記憶がよく思い出せなくなっていたんだ。家族、友人、私がどういった人物だったのか、それすらもあやふやとなり、思い出せない。ただ、私が女子高生で東方ｐｒｏｊｅｃｔが大好きだったことだけは覚えている。

最初こそ戸惑いや困惑で悩んでいたが、時が経ち、長い長い時間が進むと気にすることはなくなった。

なぜ『風見幽香』の身体でこの世界に誕生したのか、いや、それとも憑依したのか？　どれだけ考えた所で行き着く先は結局――わからない。

考えるだけ無駄なら、悩む必要もない。考えなければいい。

「こんにちは幽香、なにか考え事かしら？」

静寂に包まれた花畑で夜風に吹かれていると、突如そこに現れた、怪しい笑みを張り付かせながら言う目の前の女性――八雲（やくも）　紫（ゆかり）に、私は苦笑を零す。

「覗き見とは趣味が悪いわね」
「ふふっそれは仕方ないわ。だって、それは私の楽しみだもの」
口に手を当てて笑う紫――心の中でゆかりんと呼ぶ――に、私は昔を思い出す。
今でこそこんな穏やかな会話をしているが、昔は死闘を演じた仲だ。
私の力に興味を抱いた彼女は実力を図ろうとして、私に戦いを挑んできた。私としてはそんな理由でゆかりんと戦いたくはなかったが、逃れられぬ事は理解していた。
だからこそ、私は生き残るために最初から全力で挑んだ。
結果は引き分け。
戦闘が終わると、周りの木々は軒並み倒れ、山は半分ほど削れて更地になっていた。我ながらよく暴れたものだと思ったわ。
その後、私に紫は提案をしてきたんだよね。
――幻想郷に来ない？
そう、彼女は言っていた。私はそれに二つ返事で了承した。
だって〝あの幻想郷〟だよ？　いかなきゃ損だ。
厳しい戦いだったが、そのお陰で今ではゆかりんと気軽に話せる仲になったし、幻想郷にも来れた。
内心涙目で戦った意味があってホントよかったよ。うん。
「それで、何か用かしら？」
「あら？　用がないと来てはいけないの？」
私が聞くと、わざとらしく泣き真似をするゆかりんに、溜め息を吐く。
「じゃあ用がないのなら帰ってくれる？」
いやね、ホントに用がなくて来てくれたのなら帰って欲しくはないんだよ？　ただね、ゆかりんが私の所に来る時は大抵面倒事なんだよね。しかも、決まって面倒事の時はこうやって三文芝居をするんだよ。
はぁ……でもどうせ断れないんだよな～～……。
「ウソウソ、用があってきたのよ。だからそう邪険にしないで？」

「……じゃあ早く話してくれる？」
予感の的中に内心頭を抱える私は無意識に瞳を鋭くする。
すると、ゆかりんは肩を竦めてその〝用〟とやらの説明を始めた。
「実は、貴女に頼みたいことがあって来たのよ。でも、その頼み事の前に少し聞きたいことがあるのだけど、吸血鬼が幻想郷に侵略してきたのは知っているの？」
「えぇ知っているわ。力の弱った妖怪を力ずくで従わせ、色んな所で大暴れしているようね」
私の言葉に、ゆかりんは困った顔をする。
「まさかここまで被害が拡大するとは思わなかったわ。少し、侮っていたわね。だから、もう侮ることはしない。全力で叩き潰す事に決めたの。そこで貴女の登場よ」
「私にその吸血鬼を潰して欲しいの？」
「いいえ、吸血鬼自体は私がこの手で潰すわ。貴女にはその間の道中で邪魔をする奴らを相手にして欲しいの」
「雑魚の相手ね……」
「強い者と戦いたい貴女には悪いと思っているわ。お願いできるかしら？」
私の呟きに苦笑するゆかりん。
いや違うよ？　私は別に雑魚が相手で不満とか抱いていないよ？
寧ろ雑魚が相手で胸を撫で下ろしてるから。心の底から安堵してるから！
「いいわ。その頼みを聞いてあげる」
すごい上から目線な言い方で申し訳ない。けど、これが『風見幽香』だから。私はこの在り方を変えるつもりはない。
とかカッコつけて実は勝手に口が動いてしまうだけです。調子こきました……。
「感謝するわ。それじゃ、さっそく働いてもらいましょうか」
「ゆっくりする暇もないわね」
「悪いわね。流石にこれ以上吸血鬼にでかい顔をさせるわけにはいかないの。さぁ、ついてきて頂戴」

空間の境界を操って裂け目を作り、目玉が奥から見える不気味な空間が顔を出す。
これが八雲　紫が持つ〝境界を操る程度の能力〟だ。あらゆる境界を操ることが出来ると言われるチートである。
ゆかりんが本気になればその能力を使って吸血鬼を打倒することも難しくはないと思うのだけど、なんでそれをしないのか、疑問を覚えるが、まぁ今は気にしないでおこう。どうせ考えてもゆかりんの事を理解するのは不可能だ。
私はゆかりんの作ったスキマへと入り、目的の場所に向かった。

――――少女移動中――――

スキマから出ると、目の前に紅い洋館がお出迎えする。
あぁ……やっぱりここか。
予想していた通りの展開に、私は一人頷く。
今起こっている事態は、私の原作知識にある出来事『吸血鬼異変』だ。
数少ない情報で知っている事は、当時の幻想郷にいる妖怪達は気力を無くし、弱体化していて〝外〟からきた吸血鬼たちは強力な力があったために短期間で数多くの妖怪が吸血鬼の軍門に下って部下にされたというものだ。
まさにその原作にあった事が私の目の前に起こっているわけだ。
そうなると、恐らくだが吸血鬼の親玉はあの少女なのだろうな。と、私は想像する。
原作キャラに会える事は素直に嬉しいが、残念な事に敵方、争いは避けられない。
「ここがその吸血鬼の親玉がいる場所よ。藍、出てきなさい」
「ここに、紫様」
紫の呼び声に、瞬時に返答がされ、九尾の妖狐がスキマを使って現

れる。
古代道教の法師が着ているような服で、ゆったりとした長袖ロングスカートの服を着こなす彼女、藍は、私に黙礼する。
「幽香、紫様の頼みを引き受けてくれて感謝する」
「別にいいわよ」
「ふふ、さて、藍は私と一緒に行動、幽香は敵を見つけ次第殲滅、いいわね？」
「畏まりました。紫様」
「はいはい」
従順な狐の妖怪と違って私の返答はぞんざいな言い方だ。別に怖くて強がっているわけじゃないぞ。
「私は自由に暴れてくるわ。そっちは早くこの馬鹿げた祭りを終わらせてきなさい」
要は、怖いし争い事は嫌だから早くこの争いを終わらせて下さいという私の切実な頼み。
ゆかりんマジ頼んます！
私は心の中で憂鬱になりながらも、なんでもないような態度で言い、恐らくこの洋館を守っているであろう門番の場所へと足を運ぶ。
「頼もしいわね」
「幽香を相手にする敵が少し哀れに感じます」
紫と藍の呟きは、私の耳に届くことはなかった。

第二話・門番の意地

風で揺れる木々のざわめき、暗闇から満月の一滴（ひとしずく）の光に照らされた紅い洋館が目の前にそびえ立つ。
森に囲まれた紅い洋館とか違和感しか感じないのだが。
画面上ではわりと気にしていなかったが、現実で見ると雰囲気は全く違うものだ。
不気味な館だね。
私は一歩ずつ地面を踏みしめながら心の中でごちる。
真っ直ぐ進むと、大きな門が見え、更に言えば、そこを守護するように一人の女性が仁王立ちでこちらを見ていた。
淡い緑色を主体としたチャイナドレスに、腰まであるんじゃないかという程の長い赤髪、その上には緑色の帽子を被せている。
彼女の名は『紅（ほん）　美鈴（めいりん）』と言って、紅い洋館――紅魔館の門番を務めている妖怪。
彼女は妖怪でありながら人間の真似事をするわ、人を襲わないといった妖怪らしくない妖怪だ。
さて、大人しく通らせてくれるかな……？
ゆっくりと、威圧するように妖力を高め、余裕を崩さない態度を持って、私は美鈴の正面に立つ。
「こんにちは門番さん」
「はは……どうも、お客様、じゃないですよね～」
「残念ながら違うわね」
彼女は乾いた笑いを見せるが、私は〝優しく〟笑みを浮かべ、彼女に問う。
「ここの奥にいる吸血鬼に会いたいのだけど……通らせてもらっていいかしら」
そう言って前に一歩踏み出した瞬間、彼女の目つきが鋭くなる。先ほどまで人に優しそうな目つきだったが。
やはりそう簡単には通してくれそうにないか。
「あら？　通してくれないの？」

「申し訳ありません。私の主がここを誰も通すなとの命令をしているので、誰であろうとここは通らせることは出来ないんですよ」
「そう……争い事は好まないけど、仕方ないわね」
私はそれだけ言い、内に秘めていた妖力を開放する。風見幽香がいつも持ち歩く『日傘』を手に、私は戦闘態勢を整えてから、もう一度だけ、今度はもっと威圧的に私は彼女に問う。
「もう一度だけ、言うわ。ここを通らせてはくれないかしら？」
「断る!!」
美鈴から放たれた否定の言葉を皮切りに、闘争が始まった。
私はゆったりとした動きで彼女に迫り、一方で美鈴は勢いをつけるために走る。
私は攻めに行くことはない。何故なら彼女、美鈴は格闘を得意とする者で、簡単に説明するならば、素人がプロボクサーに挑むようなものなのだ。
身体能力は私のほうが高くとも、技能では圧倒的に不利、だから攻めない。
けど、負けることは〝絶対〟にない。
高速で私に肉薄する美鈴は、素早い動作で私の顎に掌底を叩き込む。
「はっ！」
「ッ！」
強制的に顔を上に向かせられ、身体が少し宙に浮く。そこから流れるように蹴りや拳が追撃する。
それを私は〝無防備〟に受ける。
「ハァァァァァッ!!」
気を高めた美鈴の拳が最後に腹部へと打ち込まれる。
だが、それで私の身体が後方へと吹き飛ばされた訳ではない。
その事に驚愕の表情を美鈴は私に見せる。
「馬鹿な……」
私の腹部に拳を当てたまま、彼女の口からそんな言葉が漏れた。
我ながら本当に、馬鹿げた身体をしていると痛感するよ。

『風見幽香』の肉体は本当におかしい。美鈴が最後に放った一撃は、恐らく上級妖怪にも匹敵するほどの威力を持っている。
だが〝上級の妖怪に匹敵するからといって〟それは風見幽香に通用するかと言われれば、答えは否だ。
「さて、門番さん。準備運動はもう終わりかしら？　それなら次は、私の準備運動に付き合ってもらうわ」
全く効いていない事を証明するように、笑顔を見せながら、私は手に持つ日傘で美鈴の腹部に突きを入れる。
「カハッ!?」
肺から全ての空気を吐き出し、身体をくの字に折り曲げ、美鈴は後ろへと吹き飛ばされる。
私はその姿を冷静に見つめながら、頭の中では色々と考えていた。
圧倒的な力を見せつけ、絶望を与え、戦意を喪失させることが出来ればいいが、相手は門を守るのに、言葉通り命がけ。そんな相手の戦意を喪失させることはほぼ不可能だ。
ならば、最早残る方法は一つ、再起不能にさせるのだ。
簡単に言う私だが、それが出来るから言っている。勘違いしないでほしいのは、彼女が決して弱くないということだ。ただ、私が強すぎるだけだ。傲慢な考えだと思う人もいるだろう。だが、これが現実なのだ。最早、この戦いは戦う前に勝敗は決しているのだから……。
「……頑丈ね。大人しく寝ていたほうが身のためだと思うけど？」
「いやいや、門番が敵を前に大人しく寝ることなんて出来ませんよ」
腹部に手を当てながらも立ち上がる目の前の門番に、私は溜め息を吐く。
「時間を掛けたくはないし、次は手加減はしないわ」
お願いだから素直に寝ててよ美鈴。と、私は言いたいけど言えるわけもない。ならこの戦いを早く終わらせるまで。
私は目を細め、ここで初めて、歩くのではなく、走った。
足に力を込めれば地面は抉れ、一歩を踏み出せば大砲が発射されたように直線に進む。
私が本気になったことを理解した美鈴は瞬時に気を高め、両腕をク

ロスさせる。
耐える気だな。それは間違った選択だと後悔するだろう。
日傘を持つ手に力を込める。
助走の勢いをつけ、日傘を持つ手を真上に上げる。美鈴に肉薄した私は上げていた日傘を躊躇いもなく振り下ろす。
日傘が美鈴の腕に当たった時、ズンッ！　と、重たい音が鳴る。それと同時に美鈴の足は地面に減り込み、地割れが起きる。私の日傘を受け止めた腕からは鈍い音が響いた。
確実に骨は折れただろうな。
「ぐっ！」
苦悶の声を漏らす美鈴だが、その瞳からは未だに諦めの色は見えない。
ならば、追撃するまで。
私は振り下ろした日傘をもう一度美鈴の腕に叩きこむ。
軋む音が、苦悶の声が響く。
それでも彼女は負けを認めない。
「強情ね」
「諦めの悪さには自信があります」
「減らず口を」
日傘を持たない空いた手で、私はボディブローを放つ。拳は美鈴の胸の中心に入り、身体を上へと浮かせ、日傘で地面に叩きつける。
叩きつけられた美鈴は激しい音と共に地面に陥没した。
「これで終わりよ……はぁ、ホントに諦めが悪いわね」
私が戦いの終わりを宣言すると、彼女はまだ終わっていないと言うように、ボロボロになった身体を起こし、再び立ち上がった。
その執念に、私はやれやれと首を横に振る。
今度こそ沈める、と、私は日傘でまた地面に叩きつけようとした時、気づく。
「貴女は本当に諦めが悪いのね」
門の前で彼女は腕を広げ、まるでこの先には行かせないと言うように、門を守ったまま〝気絶〟していた。

殆ど呼吸も出来ない、荒い呼吸を繰り返し、折れているはずの腕を必死に上げ、瞳からは光を失い、されど、彼女は門を守る。
「大した意地ね」
上に掲げていた日傘を下げ、私は苦笑する。
美鈴の門番としての意地は相当なものであった。それは恐らく中にいる紅魔館のメンバーを守るために、なんだろうな。
優しい門番に、私は無駄だとわかっていても口を開く。
「大丈夫。貴女の守るべき人たちは誰一人死なないわ。だから、貴女は少し休んでいなさい」
美鈴の開いた瞼を優しく閉じ、門の近くに彼女を運ぶ。
身体を労るように、私はゆっくりと地面に寝かせた。
「貴女にしては随分と手こずっていたわね」
後ろで観戦していたのか、ゆかりんが怪しい笑みを浮かべたまま話しかけてくる。
「そうね。この門番を少し甘く見ていたわ」
「この娘は善戦したほうね。けれど、貴女がその気になれば一瞬でかたをつけられたでしょうに。もしかして遊んでいたのかしら？　酷いわね～」
扇子で口元を隠しながらクスクスと笑うゆかりんに、私は誤解だと叫びたいが、ギリギリの所で我慢する。どうせ何を言っても私の言葉に耳を貸さないのは目に見えている。
だから、私は少し怒った声で返す。
「私は、早くこの馬鹿げた祭りを終わらせなさい、と、言ったけど？
なぜ貴女がここにいるのかしら？」
「あぁえっと……それじゃまたね幽香」
「すまない幽香」
不機嫌そうにしわを眉間につくる私に、ゆかりんは焦った様な口ぶりで別れを告げてスキマを使って消える。
そんな情けない主人を追うべく藍もまたスキマを使うが、行く前に申し訳無さそうな顔で謝る藍に、私は手を振って返す。
藍は悪くない。恐らくゆかりんがちょっと見てから行きましょ、な

んて言って付き合わされたのだろう。全く、さっきまで吸血鬼にこれ以上大きな顔をさせないと言っていたのにこれだ。

相変わらずのゆかりんの性格にやれやれと首を振り、私は今一度、紅魔館を見る。

ここから先はもっとやっかいな相手と戦わなければならない、か。

本来は穏便な方法で終わらせたいところだが、そうもいかないのが現状。ま、誰一人死なないで終わらせる事を目指して、頑張りますか。

重たくなる足を動かし、私は紅魔館の門を潜った。

第三話・動かない大図書館にご挨拶（ゆうかりんスマイル）

コツコツと廊下に足音が鳴り響く。
周りは紅い壁、下も赤い絨毯、全てが紅く彩られている。正直目が痛くなる光景だ。
と言うか、いつまで続くんだこの廊下は……。
かれこれ数分は歩いているが、一向に真新しい景色が見えないのだ。これは恐らく、紅魔館のメイド長『十六夜（いざよい）　咲夜（さくや）』の能力が原因か。
彼女は〝時間を操る程度の能力〟を扱う。時間の流れを遅くして高速に動くことや、時間の流れを速めて存在を変化させる事ができる。
更に、時間と密接に関係する空間も操作することができ、これによって紅魔館内の空間が拡張されているのだ。
人間でありながら恐るべき能力を持つ彼女とは、出来たら会いたくはないものだ。上手く手加減ができそうにないからね。
それにしても、おかしい。
何がおかしいのか、それは、洋館内に妖怪がいないことだ。
てっきり、部下にした妖怪で溢れかえっていると予想していたのだが、見当が外れたようだ。
もしかしたら洋館内に入れたくなかったのか。自分の城に下等な妖怪をいれることを嫌いそうだ。紅魔館の主は。
長い廊下を歩きながら様々な考えを巡らせていると、長い廊下の先に、他よりも少し大きな扉が見える。
行ってみようかな。
このまま廊下を歩いていても埒が明かないと思い、私はその扉に近づき、取っ手を掴んで押し開く。
開かれた先に待っていたのは膨大な量の本。
数えるのすら億劫になるほどの本が周りを囲む空間に、私はここが

何処か直ぐに気づく。
ここは紅魔館が誇る大図書館、そして、ここの管理を任されているのが。
「招かれざる客が来たわね」
開かれていた本を閉じ、静かな、けれどこの広い空間には良く響く声が、私の耳に伝わる。
長い紫髪の先をリボンでまとめ、紫と薄紫の縦じまが入った、ゆったりとした服を着用し、さらにその上から薄紫の服を着た少女。ドアキャップの様な変わった帽子を被るこの少女の名は『パチュリー・ノーレッジ』
私は埃や本独特の古臭いにおいに顔をしかめながら、彼女に向かって歩く。
「お邪魔しているわ」
「……美鈴は、門番はどうなったの」
「安心して、死んではいないわ。ただ、無事とも言えないけれど」
私はわざと挑発するような事を言う。これで冷静さを欠いてくれればラッキーだけれど、さぁ、どう出るかな?
私は笑みを張り付かせて目の前の魔法使いを観察する。
「そう、なら問題はないわね」
「あら?　心配ではないの?」
「生きている事が知れれば十分、アレはそう簡単に死なないわ」
澄ました顔で言うあたり、彼女は本当に心配をしていないようだ。どうやら紅魔館のメンバーは私が思っているよりも固い絆を持っているようだね。
これは一筋縄ではいかないな。
「それじゃあ心置きなく戦えるわね」
「いつもなら断るところだけど、今日は頗(すこぶ)る調子が良いの。だから、相手してあげる」
言葉が終わると、彼女は本を片手に呪文を唱え始めた。
「炎の輝きをそこに示し、地上を焼きつくせ《アグニシャイン》」
パチュリーの周りに炎の渦が出現し、室内の熱が上がり、空気が息

苦しくなる。
それはそうと単純に思ったのだが、アレは暑くはないのだろうか？
くだらない事を考えていると、パチュリーは不敵な笑みを浮かべる。
「風の精霊よ、敵をその風の刃で切り裂け《シルフィホルン》」
私を囲むように風の刃が生まれる。その風は周囲を埋め尽くすほど、そして、その風が追い風となり、先に発動していたアグニシャインの炎が倍以上に膨れ上がる。
流石は一週間少女、中々厄介な相手だ。こうも簡単に魔法を連続して行使するとは。
日傘を広げ、私は周りを見渡す。
「その余裕な態度、いつまで続くのか見物ね」
私は別に余裕な態度をしている訳じゃないのだけど、寧ろこれどうしよう……って、軽く現実逃避してるくらいだからね。
それにしても、上から目線で言う彼女からは棘を感じるな。
……もしかして、パチュリー怒ってる？　どうやら彼女はポーカーフェイスは上手いが、感情のコントロールは上手くないようだ。
思っていたよりも激情家なのかもしれないね。
「その言葉、そっくりそのまま貴女に返すわ」
「言ってなさい！」
パチュリーの手が振り下ろされると、宙を彷徨っていた魔法は私に向かって一斉に襲いかかる。
暴風と灼熱、これを無防備に食らうのはちょっとキツイかな。
私は妖力を日傘に送り、丈夫さ、大きさを変えて魔法を受け止める準備をする。
傍から見たら日傘でこの嵐を受け止める事は不可能だと思うだろう。
けど、この日傘は〝普通〟じゃない。これは私の身体の一部、故に、壊れる心配もない。
〝幻想郷で枯れない唯一の花〟と言われたこの日傘『風見幽香』が言った言葉だが、まさにその通り。

何故って？　私が死なない限りこの〝花〟は枯れないからよ。
ゴウッ！　と、吹き荒れる暴風を日傘は難なく受け止め、肉を一瞬にして灰にする灼熱も日傘には焼け跡一つ残らない。
「もう終わり？」
魔法の行使が終わるタイミングで、私は日傘から顔を出し、彼女の顔を見る。
「ッ！　まだ終わりじゃない！」
本のページを捲り、彼女は声を高々に叫ぶ。
「全てを溶かし、巨大な溶岩を持って殲滅しろ《ラーヴァクロムレク》」
人間一人簡単に潰せそうな溶岩が幾つも作られ、四方八方から私を潰そうと迫り来る。
今度は日傘を閉じ、私はボールを打つ姿勢を作り、日傘を両手で持ち構える。
「溶岩を打つ日が来るとは思わなかったわ」
冗談を言いながら、私は腕に、手に力を入れ、日傘を振り抜く。
日傘は綺麗に溶岩の中心に当たり、弾丸の如く打ち返す。
「な……!?」
驚愕した表情を見せるパチュリーに向かって溶岩が迫る。自分で作った魔法がまさか打ち返されるとは思わなかったのだろう。
彼女はすぐに防御をするために透明な結界が張られた。
私が打ち返す溶岩は全部弾き飛ばされていく。まぁそんな簡単にやられはしないか。
しかし、笑みを作りながら平気でそんな事をする私は結構余裕そうな印象を受けるかと思うが、実際はいっぱいっぱいだったりする。
（ぬぉぉぉぉぉぉ!?　なにこれ、ちょ、なにこれ!?）
……必死に頑張っている事をどうか理解してほしい。
「はぁ……はぁ……」
立て続けに魔法を発動させていたパチュリーは、苦しそうな顔で荒い呼吸を繰り返す。
やっと症状が出始めたか。
彼女、パチュリーには喘息の持病を持っている設定があるのだ。

この設定が原作通りで、私は安堵していたりする。美鈴と違って魔法使いの身体は頑丈ではない。
だから攻めるに攻められなかった。勢い余って死なせてしまうなんて笑えないからね。
胸を押さえて、苦悶の表情を見せるパチュリーに、私はゆっくりと、だがしっかりとした歩きで、彼女に近づく。
「もう魔法は使わないのかしら？」
「はぁ、く、黙りなさいッ！」
「負けを認めなさい。貴女じゃ私に勝てないわ」
パチュリーの眼前に、日傘を拳銃で撃つ様な体勢――ただし片手だが――にして、私は言い放つ。
「チェックメイト。もう貴女は詰んでいるわ。魔法使い」
「……降参よ」
両の手を上にあげ、溜め息とともに彼女は言った。
ふぅ、素直に降参してくれて助かった。喘息を悪化させる事は出来れば避けたいことでもあったからね。
「それで、私はどうなるの？」
「別にどうもしないわ。貴女に戦う意志がないのならもう相手をする気もないわよ。けど、二つほど聞きたい事があるわ」
「なにかしら？」
私は無数にある本棚の中から一点を見つめて、言う。
「どうして〝二人〟で同時に戦いを挑まなかったの？」
「こぁの事ね。あの子は戦闘用ではないのよ。いてもこの結果は変わらなかったわ」
なるほど、まぁそれもあるが、身内には優しい彼女の事だ。戦いに参加させたくもなかったのだろう。
「じゃあ二つ目、なぜ幻想郷を侵略しようと思ったのかしら？」
私の問に、彼女は苦笑を持って返してきた。
「始めに言っておくわ。私は侵略に興味はないわ。けれど、レミィは興味があったみたいね」
「レミィ？」

その名前は知っているが、私が知っていてはおかしな話しになってしまう。
だから、私は聞き返した。
「えぇ、本名は『レミリア・スカーレット』この紅魔館の当主にして吸血鬼よ。侵略はレミィの命令で始まったわね」
「止めようとは思わなかったの？」
「私が言っても誰が言ってもアレは止まらないわ」
やれやれと首を横にふりながら話す彼女に、私は内心、やっぱそうなのかと、納得していた。
レミリア・スカーレットは、超がつくほどの我が儘であり不遜な少女だ。親友であろうと誰であろうと止めることは出来ないか。
「そうなの。全く困った吸血鬼ね」
「そこは同感ね」
疲れた表情をする彼女に、私は内心同情する。パチュリーは苦労人なんだね。
「疲れたし、しばらくここにいさせてもらうけど、構わないかしら？」
「別にいいわよ。ただ、私の読書を邪魔しなければね」
興味なさそうに答えたパチュリーは、自分の指定席へと座り、机にある本を読み始める。
さっきまであんなに激おこだったのに、もう怒りはないのかな？
私は一人首を傾げる。
まぁ、休ませてもらえることだし、いっか。もうそろそろゆかりんがレミリアを倒して契約を交わす頃だと思う。
なら、私はここで休ませてもらおう。もう原作キャラと戦うのも嫌だしね。
肩を鳴らしたり、身体を伸ばしたりしていた時、突如、扉が粉砕される。
木の欠片が辺りに散る中、二人の少女がこちらに向かって歩いてくる。
ちょ、ちょいちょい！　これはどういうこと!?
なんで、なんで!?

〝レミリア・スカーレット〟と〝十六夜　咲夜〟がここに来ているの!?　しかもメチャクチャ機嫌悪そうに私を見るレミリアに、嫌な予感しか感じない。

青みがかった銀髪を揺らし、真紅の瞳は細めている。背中に大きなコウモリの翼を持つ少女は、威圧的に言った。

「アンタが風見　幽香？」

「ええそうよ」

いやなに冷静に返してんの私。ここは嘘を吐いて逃げの一手でしょうに！

「そっ、ならアンタはここで死んでもらうわ」

「小娘がいい度胸してるじゃない」

不遜な態度でいきなり死の宣告をする目の前の少女に、私は頭を抱えたい気持ちになる。

ゆかりん、これはいったいどういうことなのっ!!!

第四話・吸血鬼と花妖怪

あぁ、なぜ私はこんな所にいるんだろう。
なんで争い事嫌いなのに争ってるんだろう。
平和を、癒やしを、誰かプリーズ……。
「はぁ……」
「溜め息を吐くなんて随分と余裕ね」
盛大な溜め息を吐く私に、目の前の少女は腕を組んでこちらを睨みつける。
そんなの知った事か。私は今、現実逃避で忙しーの。
それにしても、どうしてこうなったのだろう。私の役目は確かに出会ったやつを片っ端から倒すのが私の役目だ。けど、吸血鬼、つまりレミリアを相手にするのはゆかりんの仕事、まさかゆかりんが負けた、なんてあるわけがない。
また良からぬことでも企んでいるのかな……。
ゆかりんの、あの人を試すような真似をするの、出来たらやめてほしいものだ。試される方はたまったもんじゃないんだからね。
はぁ、考えていても何も解決しないし、目の前の厄介事をなんとかしないとダメか。
全くもって、憂鬱である。
「小さな吸血鬼さん、なぜそこまでムキになっているの？」
「あの胡散臭い妖怪が私よりもアンタの方が強いとかふざけた事を言っていたからね。試しに来たのよ」
不機嫌を隠そうともせずに言うレミリア。私は思わず目を隠すように片手で覆う。
やっぱりゆかりんのせいか。九十九％ゆかりんのせいだと思っていたけど、残りの一％は違うかも知れないと考えていたのに。
裏切られた気分だよ！
全然信じてないとか思う人、ゆかりんを信じるって相当お人好しじゃないと無理だと思うからね？
「質問があるわ。その胡散臭い妖怪とは戦わなかったの？」

「……戦ったわ。忌々しい事にこの私の敗北を喫する形でね。そこで面倒な契約をしたし、侵略も終わったわ」
ふむ、どうやらゆかりんはちゃんと仕事を果たしたようだ。
何故この目の前の小さな吸血鬼を煽る行為をしたのかは不明だけど。
「それなら私はここにいる意味はなさそうね。帰るわ」
「逃げるの？」
「貴女と戦う意味がないわ」
「貴女の意思は関係ない。私が決めるのよ」
レミリアは妖力を開放し、場が圧迫感に支配される。
いやもうホント勘弁してよ。私は早く花畑でこの荒んだ心を癒やしたいのに。
て言うかさ、咲夜かパチュリーもなんでこの暴走ガールを止めないのさ。パチュリーにいたっては自分の周りだけ結界張って読書に勤しんでいるし、咲夜は涼しい顔でその結界に逃げてるし、静観する気まんまんだなおい!?
「さぁ、諦めなさい。貴女はここで人生を終えるわ」
コウモリの翼を大きく広げ、宙に浮かんだレミリアは私を見下しながら言葉を吐く。
もう、戦いたくないとか言っても無理そうだな……仕方ない。レミリアが満足するまで相手をするしかないかな。
「〝子供〟の相手をするのは大人の役目ね。仕方ないから相手をしてあげるわ」
おぉう、相も変わらず私のこの口は敵を挑発するような言動を吐くね。
「その余裕な態度、いつまで持つのか楽しみね！」
人間の目ならレミリアが消えたように見えたことだろう。それほどまでに早い動きで私に肉薄するレミリアに、私は真正面から受けて立つ。
ズンッ！　と、重い音が大図書館内に響く。
その音の正体は、レミリアから放たれた拳を片手で受け止めた瞬間

に起きた衝撃音だ。
「やるじゃない。私のスピードとパワーに真っ向から受け止めるなんて」
どこまでも傲慢な少女だ。自分の力に絶対の自信を持つからこその余裕、流石は吸血鬼、流石はレミリア・スカーレットか。
それならその自信を折るまで。
「それで本気なの？　だとしたらガッカリね」
わざとらしく心底残念な声で私はレミリアに言い放つ。
「ナメるなっ！」
安い挑発にレミリアは激高し、空いた手で私の頬に向かって拳が振るわれる。
私はそれを〝敢えて〟何もせずに受ける。
頬にトラックが衝突したんじゃないかと思うほどの衝撃がくる。これがそこらの妖怪または人間なら首から上は吹き飛んで消えていただろう。
それを私は見事受け止め、まるで全然効いていないというように笑みを作り、レミリアを見る。
「吸血鬼といってもこの程度ね」
「減らず口をたたくな」
はい全くその通り、痛すぎて涙流すのを必死に堪えてるのでいい返す言葉もない。
「なら、証明してあげるわ。貴女の攻撃が効かないと言うことを」
けど我慢すれば私の〝勝ち〟だ。だから、私はレミリアにある提案をする。
「貴女の攻撃をこれから全て受けきる。勿論防御もしないし、制限時間もないわ。ちょっとしたゲームよ、どう？」
「アンタ馬鹿？　それともさっきの攻撃で頭がイカれた？　そんな提案をしてアンタにはなんの得もないじゃない」
呆れた視線を送ってくる少女に、私は笑みを深める。
「なに？　怖いの？　自分の力に自信がないのかしら？」
「……いいわ。その提案乗ってあげる」

私の言葉を聞いたレミリアの瞳は一層冷徹になり、表情をなくす。
「馬鹿な提案をしたとアンタは後悔する。やめてと言っても私はやめないわ」
「寧ろそれを言わせて見なさい。やれるものなら……だけど？」
私の言葉が終わると同時にレミリアの猛攻撃が始まる。
顔を集中的に殴られ、強烈な蹴りは肉を抉る。
嵐のような連撃に、私はただ耐える。

時間にして数分、その間レミリアの攻撃を受け続けた私の身体は一度足りとも後ろに下がっていない。
「もう終わりかしら？」
服は破れ、口から血が流れていようと、私は笑みを浮かべる。
その姿に、レミリアは初めて驚愕の表情を見せ、少し顔を強張らせる。
「痩せ我慢してないで降参したら？」
「別に痩せ我慢なんてしていないわ。ほら、ゲームは始まったばかりよ？　続けましょう」
腕を広げ、私はただゲームを続ける様に言った。
レミリアは戸惑いを見せ、焦りを見せる。
それはそうだろう。自分の全力の攻撃を無防備に受け続ける事が出来る敵など、いなかったはずだ。
いても一撃か二撃か、手で数える程度なのは想像に難くない。
「どうしたの？　ほら、遠慮無く来なさい」
頬に指を当てて、ここに拳を撃ちこめと私はレミリアに言う。
けれど、レミリアはその挑発に答える気配がない。
その代わり、小さな、それこそ囁く程の声で、何かをブツブツと言っている。
「そんな、こんなこと、ありえない。ありえるはずがない。私は誇り高きスカーレット家当主よ。こんな奴に、負けるなどありえないっ!!!」
最後の方は絶叫に近い。後方に飛び、レミリアは妖力を一点に集め、形を作り出す。

それは紅い槍、少女の身体の倍以上もある巨大な紅い槍。
――神槍『スピア・ザ・グングニル』
少女は全ての妖力をその槍に込め、私の身体に向けて投げ込む。
直線に投げ込まれた神槍はわたしの胸に吸い込まれるように進み、抵抗もなく肉を裂き、骨を断ち、貫く。
「はぁ……はぁ……これで、終わりよ」
肩で息をするレミリアは、初めて大きなキズを私につけることが出来て、失いかけていた自信を取り戻したのか、勝ち誇った顔をする。
神槍を胸に貫かれた時に下がってしまった顔を、私はゆっくりと上げ〝変わらぬ笑み〟を浮かべる。
「次はどんな攻撃をするのかしら?」
どこまでも平気な顔で、まるで効いていないと言うように言ってのける。
怪我を負っている、それも胸を貫かれるという酷い傷を受けているのだ。そんなもの痩せ我慢であると、冷静に考えればわかるはずだ。
だが――レミリアにはその冷静な考えが出来なくなっていた。
「……こ……よ」
「ん? 何か言ったかしら? よく聞こえなかったわ」
ふるふると震えながら、少女は振り絞るように言葉を吐く。
「降参よ!! これでいいんでしょ!?」
若干涙目で叫ぶように放った言葉に、私は小さく、レミリアにバレない程度に安堵の息を吐く。
「そう、それじゃあ私の勝ちね」
疲れた声で私は言い、いつの間にか胸にあった神槍が消えていることに気づく。つかめっちゃ痛い。
今回は少し無茶をしすぎた。
けど、これでレミリアはしばらく大人しくなるだろう。
プライドを砕かれ、自身の力ではどうすることも出来ない相手がいる事を知った。
もしかしてゆかりんは自分以外でこういった強力な妖怪の抑止力が欲しくてこんな回りくどい事をしたのだろうか。

なんだかありえそうだ。
「それじゃあ私は帰るわ」
大きな傷があるとは思えない軽やかさで、出口に向かう。
花畑で休もう。今日は疲れた。

風見幽香がいなくなったのを確認したレミリアは、その場に崩れる。
「お嬢様!?」
「大丈夫よ。咲夜」
頼りない声音に、咲夜は心配そうな顔をする。
「なぜ一人で挑むと言ったのですか。私の力があればもっとやりようはあったでしょう」
「二体一なんてそんな卑怯をすればスカーレット家の名に傷ができるわ。でも、流石にここまでの力の差があるとは、思わなかった」
苦笑する目の前の主人に、咲夜は困った顔をする。
「レミィ、この結果は〝見えて〟いたの?」
「いいえ、何も見えてないわ。だからこそ挑んだのよ。結果は惨敗。敵は私に攻撃をせずに勝った。忘れ去られた妖怪と聞いて弱った妖怪しかいないと思っていたけど、それは間違っていたわね」
悔しそうに手を握るレミリアに、パチュリーは頷く。
「そうね。あの妖怪は危険だわ」
「えぇ。単純な力だけじゃない。妖怪としての格が違う。正直、二度と戦いたくはないわね」
無意識に身を震わせるレミリアに、パチュリーは同意するようにもう一度頷き、最後まで余裕の笑みを浮かべていたあの妖怪が出て行ったところを見つめる。

今日、この日、紅魔館に多大な損害を与え、レミリアの心を折ると

いう事を成し遂げた風見幽香という妖怪に、紅魔館のメンバーは畏怖を覚えさせられた。

だが、そんな事も知らずに幽香が紅魔館に遊びに行って、紅魔館が騒がしくなるのは、少し先の未来。

第五話・八雲藍は思う

「紫様、お茶です」
「ありがとう藍」
　静かな空間に包まれた居間で、私と紫様はお茶を飲みながらゆっくりとしていた。スキマを覗きながらだが。
「紫様、なぜ幽香にあのようなことを？」
　レミリアと幽香の戦いが終わったのをスキマから確認した私は、紫様に問う。
　紫様の考えることはわからないことが多い。従者である私は紫様の考えることを誰よりも理解しなければならないが、まだ私が未熟ゆえに、それが出来ない。
　まだまだ精進が必要だな。
「幽香の事を知りたかったから、かしらね」
　優雅な動作で扇子を開き、それで口を隠しながら紫様は言葉を吐く。
「幽香の事を知りたかった、ですか……？」
「そうよ。幽香はどんな考えをしているか、どれほどの力を持っているか、幽香に関する事をもっと知りたいのよ」
　紫様は楽しそうに目を細める。
　その様子に、私はなんとか溜め息を吐くのを我慢する。
　困ったことに、紫様は幽香の事になると暴走するのだ。それも毎回。
　私としてはその暴走は即刻やめていただきたい。幽香に会う度に私の胃がキリキリとするのだ。正直生きた心地がしない。
　幽香は普段は優しく穏やかだ。長年生きた妖怪だからこその余裕があるのだが、一度でも怒りを買えば対応は大きく変わる。
　因みに、彼女を怒らせた者が絶対に口にするのは〝風見幽香〟は絶対に怒らせてはならない妖怪である。ということだけだ。
　どんな目にあったかは明確には聞いたことはないが、想像を絶する体験をしたのだろうな。

「幽香の事でなにかわかりましたか？」
「……変わらない、そう、幽香は昔から何も変わっていないと言うのはわかったわ」
「昔……紫様が出会った頃の幽香は今とそれほど変わらないのですか？」
　それはちょっとした好奇心。
　紫様が初めて会った頃の幽香はもしかしたら今とは少し違うかもと、ちょっとした期待があった。先ほど昔から変わらないと紫様は言っていたが、流石になにかしら変わっている部分はあるはずだと思ったのだ。
「そうねぇ、どれぐらい前だったかしら？」
　紫様の口から出てきたのはそんな言葉だった。昔を思い出すように視線を上に向け、扇子を膝に下げて、遠くを見ながら懐かしむように笑みを作る。
「幽香は今も昔もちっとも変わらないわ。誰にも媚びず、どんな妖怪よりもただただ強く、その笑みは木っ端妖怪、人間を恐怖させていたわね。それでも歯向かうものには容赦なく恐怖のドン底に落とし、二度と歯向かおうなどと思わせない様にしていたわ」
「幽香は今も昔も本当に変わらないのですね」
　少し期待していたが幽香は今も昔も本当に変わっていないようだ。心の中で残念に思いながら私は苦笑気味に言うと、紫様は同じように苦笑する。
「幽香は一貫した態度を崩さないわ。どんな相手であろうと恐怖も怯えも見せない。けれど、そんな彼女の事を、偶に人間臭く感じる時があるわ」
「人間臭い、ですか」
「えぇ。妖怪である私達の多くは身勝手で人間の都合なんて考えなければ価値観も違う。そうでしょ？」
　突然違う話題で問いかける自分の主に、私は無言で頷く。
「そう、人間と妖怪は根本的に違う。人間は殺すことに忌避感を感じるけれど、妖怪は殺す事に忌避感など感じないわ。なのに、幽香はど

こか、殺すことに忌避感を感じているように思えるのよ」
紫様の口から放たれた言葉を理解するのに数十秒掛かってしまう。その間、私は頭の天辺から足のつま先まで微動だにせず、紫様を見ていた。
〝あの幽香〟が殺す事に忌避感を感じているなど、私にはどうしても思えない。
頭の中でそんな事ばかりが思い浮かぶ。紫様は私の考えなどお見通しなのか「しょうがないわね」と、溜め息を吐きながら言葉を続けた。
「今回の事件で戦った幽香の敵はどうなったか、そして、私は幽香にどんな頼みをしたのか思い出してみなさい」
答えを言わず、自分で考えなさいと紫様は言うと、そのまま黙りこむ。恐らく私が正解の言葉を導き出すまで待つということなのだろう。
それなら私はその期待に応えなくては。
まず、幽香と戦った相手がどうなったか、だな。門番は幽香の手で半殺しにされた。その次の魔法使いは魔法を全て無効化されて持病の喘息で降参。最後に吸血鬼レミリア・スカーレットも魔法使い同様降参して終わった。
紫様は幽香に敵を見つけ次第殲滅と言っていた。
……なるほど、幽香は殺すことに忌避感を感じていると言う紫様の気持ちが少しはわかった気がする。何故なら紫様は『敵を見つけ次第殲滅しろ』と、確かに言ったはずだ。
だが、幽香は敵を無効化こそしたが殺していない。それも誰一人としてだ。
私は自分の中で整理した答えを口にする。
「殺すことなど容易い筈の力を持ちながら今回敵対した相手を殺さずに無効化した幽香は、確かに見方によれば殺すことに忌避感を感じているかも知れません。ですが、彼女からしたらあれは遊びだったかも知れませんよ?」
「その考えもないとは言わないわ。それが今回だけの話しなら、私も

こんな事を考えたりしないわよ」
　再び扇子で顔を隠す紫様は、そのまま話を続ける。
「幽香が誰かを死に追いやった所を、私は見たことがないわ。妖怪も人間も、大怪我をすることはあっても死ぬほどではなかったのよ。ねえ、藍。これを聞いても幽香は殺しに忌避感を感じていないと言えるかしら？」
「それは……」
　それ以上私の口から言葉が出なかった。
　紫様はそんな私に、気にした様子もなく話を再開する。
「幽香は殺すことに躊躇しているようにも見えるわ。更に言えば、人間に見えないように手助けをしている所を私は何度も目にしているのよ。もしかしたら人間の男に〝恋〟をしていたかもしれないわね。私にはその気持ちがわからないから断言は出来ないのだけど」
　紫様の口から出てくる言葉はどれも信じられないような内容で、私の脳内は混乱していた。
　幽香は紫様と同等の存在で、人間だけでなく同じ妖怪にも恐れられる存在。その彼女が人間の男に恋を抱く？　人を助ける？　およそ信じることなど出来ないものばかりだ。
　私の主である紫様は様々な者に胡散臭いと言われている。それは紫様がよく言葉遊びをしている事が原因で、相手に真実も伝えるが嘘も伝えるからだ。
　だが、いま紫様が話していることが嘘偽りがないとしたら、私は幽香の見方が大きく変わるだろう。
「紫様が幽香の事を人間臭いというのはそういった事を見たからだったんですね」
「そうなるわね。と言っても、そう思うだけで私の推測が正しいとも限らないわ。人間に恋をしていたというのも間違いの可能性だってあるわ。いえ、間違っている可能性の方が大きいかも知れないわね。幽香の表情を見ても何か変わった所があった訳でもなかったし……結局のところ想像の域を出ないのよね～」
　扇子で口元を隠しながら欠伸を噛み殺し、紫様は言った。

つまるところ、全てが想像の中で、それが事実だと証明するには証拠が不十分なのだ。彼女が人間に優しくするのだって気まぐれの可能性は高い。紫様が見たのが偶々そういう現場だったと言われれば何も言えない。

妖怪や人間を殺さないのだって彼女が優しいのではなく、恐怖を植え付けるためと言われれば納得してしまうだろう。寧ろ、私はそれが目的ではないかと思ってしまう。

「わからないから今回の事件を利用して少しでも知りたかった。そういうことなんですね？」

「えぇそうよ～最初に言ったでしょ？　幽香の事を知りたかったからって……まぁそれだけじゃないけど」

「まだ何かあるんですか？」

「幽香の方はついでよ。何かわかればいいなぁ～って程度、本命はレミリア・スカーレットよ」

「あの吸血鬼ですか？」

私の問に紫様は扇子を閉じ、真剣な眼差しを私に向ける。

「藍はレミリアをどう見ているのかしら？」

「そこそこ力のある妖怪だと思っています。もう少し成長すれば幻想郷の力関係のつりあいがとれる者の一人になれるかと。ただプライドが高く傲慢なところは目に余りますかね」

「悪くない回答ね。けど、私が求めていた回答とは違うわ」

どうやら紫様が納得する回答を出来なかったようだ。無念。

項垂れる私に紫様は閉じた扇子で一度頭を叩かれる。地味に痛いです……。

「藍、項垂れていないで聞きなさい。これから話すことは大事なことよ？」

「うう、はい。紫様」

「よろしい。それで、話の続きだけど、レミリアにはある能力があるのは知っているわね？」

「運命を操る程度の能力、ですね」

「そうよ。自慢気に言うレミリアはやはりまだおこちゃまだったけれ

ど、あの能力を甘く見てはダメよ」
紫様の言葉に私は少し疑問が残る。レミリアは確かに運命を操る程度の能力という一見反則的な能力に思える力を持っているが、実際はそこまで万能な能力ではなかったのだ。
相手の運命を直接変えるような真似はどうやら出来なかったようだし、未来予知というのも確実ではないようだ。もしそんな事が出来れば紫様や幽香に敗北するはずがない。
「紫様、レミリアの運命を操る程度の能力は完全ではなく、そこまで警戒するほどでもなかったかと思うんですが」
「確かに〝今は〟まだ警戒するほどの能力ではないわ。それはレミリアが能力を操りきれていないからよ。長い時が経てば、レミリアは能力を完全にものにするでしょうね。まぁ、それでも運命を自在に操る事は不可能だと断言できるけど」
「でしたら尚更そこまで警戒することもないのでは？」
「完全でなくてもある程度操ることが出来ればそれだけで脅威になる可能性が高いわ。いつも最悪な事態を想定しておいたほうがいざという時に冷静に対処ができるものよ？」
いつもの変わらない笑みを作りながら言う紫様だが、一つ、言わせて欲しい。
その最悪な事態を想定しているのに、その状況を面白おかしく引っ掻き回しているのはどこの何方か問いたい。
だが言ったところで無意味なことは知っている。紫様は面白ければそれでいいなどという考えを持っている困った主なのだ。
今も紫様は私に良いことを言ったと誇らしげに胸を張っている。確かに言っている事は正しいのだが、紫様が言っても説得力がないのだ。
もう慣れてしまったので口にこそしないのだがな。
「わかりました紫様、ではこれから紅魔館を監視しようかと思います」
「ずっとじゃなくていいわ。偶に観察してなにかしでかしそうなら私に言いなさい。いいわね？」
「御意に」

私が了承すると、紫様は立ち上がる。
「それじゃ、時間もそろそろ良さそうだし、博麗神社にいくわよ。これからの事を話し合わなければいけないわ」
鼻歌を歌いそうな雰囲気で言う紫様は、スキマを作り、サッサと行ってしまう。

全く、どこまでも自由なお方だ。

第二章『寂しい少女と恐れられる花妖怪』

第一話・友達がすくない事に最近気づいた今日この頃……

最近少しずつだが気温が上がり、ぽかぽかとした暖かさは眠気を誘う。

今日も天気が良く雲一つない空は青色に彩られ、明るい日の光を放つ太陽は見ていて気持ちがいい。ただ、明るすぎて眩しいのが困りどころかな。

まぁそれは良いとして、あの戦いから約1ヵ月が経ち、幻想郷は平和を取り戻した。

平和にはなったんだけど、最近ある〝遊び〟が流行り出して、幻想郷は今、一部だが活気に満ちている。

その遊びとは〝スペルカードルール〟もしくは〝弾幕ごっこ〟と言われる遊びだ。これは幻想郷を幻想郷として維持するために必要な役割を代わりに果たすことができる遊びなんだよね。

その役割とは《妖怪が人間を襲い、人間は妖怪を退治するという関係》で、この関係はとても重要なことだ。

もしもの話だが、人間が妖怪を恐れず存在を否定するような事が起きれば、妖怪の力が弱まりこの関係性は崩れ、人間は自分たちが住みやすい環境にするため、妖怪を排除するために動くだろう。

そうなれば〝幻想郷〟というものが無くなってしまう。

だからこそ、この〝遊び〟は重要なんだ。

疑似的とはいえ決闘を行うことが可能であり、なにより殺し合いじゃない。スポーツ感覚に近い決闘だから、妖怪は気軽に異変を起こしやすくなるし、人間も異変を解決しやすくなった。

昔と比べればだいぶ平和な世の中になったもんだよ……。

そう、昔と比べればなんとも楽しい決闘か、そう思うのだが、流行りすぎてちょっと困ることが度々起こるようになったんだ。

ある程度の力を持つ妖怪が所構わず弾幕ごっこをするせいで、花畑

が荒らされるわ森が荒らされるわでもうね……。
温厚な私も流石に頭にキテさ、そこらで弾幕ごっこやっている妖怪を叱ったら、皆して青い顔しちゃって、何故か命乞いまでしてくるし。
別に暴力を振るおうなんて考えてなかったし、ましてや、殺そうだなんて考えてなかったからね。あまりに真剣にお願いされたから思わず笑っちゃったんだけど、そしたらいきなり妖怪共が一斉に気絶したんだよね。
訳がわからなかったのが素直な感想。
私の笑顔を見て気絶する要素がわからない。ま、最終的には気にしないことにしたけど……。
若干私の心は傷ついたよ。
それから一週間は花畑で閉じこもっていた。花にずっと話しかけていたな。
寂しい奴と言われても何も反論できない自分の境遇に自然と涙が……。
私は寂しい気持ちと悲しい気持ちを切り替えるために、今、博麗神社の縁側でお茶を飲んでいたりする。

「突然お邪魔して悪いわね」
「全然悪びれる様子もなく、よくその言葉が出るわね。幽香」
不機嫌な声音で話す目の前の少女は、袖が無く、肩、腋の露出した赤い巫女服という奇抜な格好に、彼女のもう一つのトレードマークである、自己主張の激しい大きな赤いリボンが後頭部で結ばれている。この少女の名は『博麗霊夢（はくれいれいむ）』といい、博麗の巫女という役職を持つ少女だ。
「ちょっと話し相手が欲しかったのだけれど、今、忙しい？」
「……別に忙しくはないわよ」
仏頂面で答える霊夢に、心の中で可愛いっ!!　って悶えていたのは内緒。
彼女は歴代の博麗の巫女の中でも力を持っている。それこそそこ

らの妖怪じゃ手も足も出ない。
強く、だけれど普通とは少し、いや、かなりかけ離れた存在だ。色々な意味でね。
まず性格だが、彼女は単純で裏表がなく、喜怒哀楽が激しい。ただ、誰に対しても心を開かない困った娘ではある。彼女が唯一心を開くのはゆかりんぐらいかも。私にも心を開いてほしいけど、彼女の心の中に私が入れる余地はないだろうね。
彼女の、誰に対しても優しくもなく厳しくもない平等な性格は一見すると、悪くないように聞こえるが、実はそうじゃない。
何故なら、それは逆に誰に対しても興味を持たず、仲よくしようとも思わないからだ。
寂しいと思わないのか？　誰かに甘えたいとは思わないのか？
それを聞くのは簡単だ。実際聞いたことがある。
だが、答えはいつも決まってこうだ。
「別に」
この一言だけで終わる。
彼女のそんな態度、姿を見ていると、少々心配になる。
博麗の巫女という大役、親のいない環境、そういった事があるから、素直に誰かに甘えるということが出来ないのか。元々の性格なのか。
それを知ることが出来ないのが口惜しい。
私だけなのかな、そう思うのは。
……まぁ、私に心配されるようなやわな心ではないか。
少し、感傷的になっていた私は無意識に霊夢をガン見していたのか、怪訝そうな顔で霊夢は口を開いた。
「なによ？」
若干引き気味に言われていることに軽いショックを受けながら、私は感情を表に出さずに答える。
「いいえ、なにも」
「いや、絶対なんか考えながら私の事見てたでしょ」
尋問するような眼差しに私は正直に答えることも出来ず、曖昧に笑うことしかできない。

すると、霊夢は溜息を吐く。
「はぁ……もういい。アンタはいつもそうやって曖昧に笑って誤魔化すから」
「そう言わないで、せっかく楽しく話をしようと思って来たのよ？」
「それはアンタが勝手に、でしょ」
正直に話さなかったのが気に食わなかったのか、霊夢はプイッと顔を背けてしまう。
くぉぉぉぉぉ……私をそのかわゆさで萌え殺ししようとするのか!?　流石は博麗の巫女よ。末恐ろしい……。
っと、そんな馬鹿なことを考えている暇はない。このままだと霊夢の機嫌が更に悪くなって会話が出来なくなる。
慌てた私は話題を変更することにした。
「そう言えば、紫は最近ここにはくるのかしら？」
「紫？　そうねぇ、最近は頻繁に来るようになったわ。なんか弾幕ごっこの修行とか言って無駄に気合い入れてたわね」
げんなりした顔で言う霊夢に、私は苦笑いを浮かべる。
この少女は努力という言葉が嫌いなようで、自分からは決して修行をしない。だから紫はわざわざ睡眠を削ってまでここに来るのだろう。ご苦労なことだ。
「そう嫌な顔をしないであげて、紫は貴女を思ってしていることなのよ？」
「私を思うなら修行なんてしないで、今みたいにゆったりお茶を飲んでいたいわ」
不満を隠さずに言う霊夢に、私は未来の、それもそう遠くない時期に起きる異変が心配になった。
正直、この世界は原作の知識があったとしてもあまり意味がないのかもしれない。
完全に意味がないとは言わない。どういうことが起きるのか、どういった能力があるのか、どういう人物かをある程度は原作知識で知ることが出来るからだ。
だが、それはあくまで知識。

現実でゲームの通りに事が運ぶとは、私は思えない。
もしかしたら、霊夢には異変を解決することが出来ないかもしれない。もしかしたら、私が思っていた異変とは違う異変が起きるかもしれない。
考えるだけで様々な可能性、先の見えない未来が思い浮かぶ。
そもそも、私の持つこの知識は未来を見通したモノではない。
更に言えば、この知識が間違っている可能性もある。
ゲームと同じ世界にいるというだけで、これから起きる事がゲーム通りになると断言など出来はしないのだ。
なぜなら、この世に絶対はないからだ。
だからこそ、霊夢には是非とも修行をしてもらいたいが本人がこれだからね。
未だに渋い顔をしている霊夢に、私は諦めた視線送りながら内心肩を落としていると、空から元気の良い声が聞こえた。
「よぉー霊夢！　って、幽香もいるのか」
霊夢には嬉しそうな声音だが、私には明らかに嫌そうな声音で言う少女の姿を、私は顔を上げることで確認する。
金色の長い髪を太陽の光でキラキラと美しく輝かせ、その輝きを隠すようにリボンの付いたつばの広い黒い三角帽子が少し深く被っている。
箒に跨り、黒い服に白いエプロンを着た姿はどっからどう見ても魔法使い然とした身なりだ。
彼女の名前は『霧雨（きりさめ）　魔理沙（まりさ）』と言って、自由奔放で負けず嫌いのやんちゃな少女。
ついでに言うと、霊夢とは正反対の努力家だ。
「あら？　私がいてはいけない……？」
「え、えっと、そう言う意味じゃないぞ？　ただ、珍しいな～ってさ！」
器用に箒の上でわたわたと腕を振る魔理沙の必死さに、私は思わず笑みが零れる。
「そんなに焦らなくても、何もしないわよ」
「……幽香、絶対私の反応で楽しんでるだろ」

ジト目でこちらを見る魔理沙に、私は満面の笑みを見せて言う。
「だって、魔理沙の反応って面白いもの」
「もう言い返す気力もないぜ」
箒の上で疲れたように項垂れる魔理沙。
少し弄りすぎたかな？　まぁ魔理沙は弄り甲斐のある女の子だから仕方ないよね。
「で、魔理沙、一体なにしに来たのよ」
私が魔理沙を弄っていた事は軽くスルーして、霊夢は魔理沙に要件を聞く。
なんか若干棘のある言い方なのは気のせいかな？
「なんかお前、機嫌悪くないか？」
あ、やっぱり魔理沙も私と同じ気持ちみたいだ。
「うるさいのがきたら、そりゃ機嫌も悪くなるわよ」
「煩いって、せめて元気がいいって言ってくれよな」
魔理沙は何故かドヤ顔でそんなことを言い、地面に降り立つ。
「ま、別に用がある訳でもなかったが、たった今決めたぜ」
くいっと三角帽子のつばを人差し指で上げ、魔理沙は霊夢を見る。
「霊夢、弾幕ごっこしようぜ!!」
「いや」
即答だった。
そりゃあもう、完璧なまでに否定のね。
一切の可能性も考えられないほどに簡素だがダメとは言わせない雰囲気を漂わせた一言。
だが魔理沙はめげない。
「まぁまぁ、そう言わずにやらないか？」
「いやって言ってるでしょ」
「意外にやったら楽しめるかも知れないぞ」
「だから、何度も言ってるでしょ。いやよ」
「いいじゃねぇかよ～やろうぜ～？」
そんな会話を続けながら霊夢の断りもなく魔理沙は居間の中に入り、お茶碗を手に戻ってくる。

「お茶もらうぞ～」
「って言いながらもう貰ってるじゃない」
霊夢は呆れた視線を魔理沙に送るが、当の本人は気にもせずお茶をお茶碗に注ぎ、息を吹きかけて、恐る恐る口に入れる。
「ふぅーふぅー、ズズッ……ふぅ、いやぁ美味い」
「ほんとアンタは自由ね」
「照れるぜ」
「褒めてない」
見ていて面白い二人の息の合ったやりとりを観察していると、ふと思う事がある。
羨ましいな、って……。
この世界に生まれ落ちる前の私にも、こんな関係を持つ友はいたのかな。
はは、何言ってんだか、私には家族も友達の記憶もないというのに。
長い長い年月が経っているのに、未だに忘れられないこの記憶、とっくに捨てたと思っていたけど、そんなこともなかった。
まるで呪いね。
それとも、私が単に女々しいだけか。
「ん？　どうしたんだ幽香？　なんか難しい顔してるぞ？」
少々思考に沈んでいたのか、魔理沙が不思議そうな顔でこちらを見ていた。
「なんでもないわ。ちょっと昔を思い出していただけよ」
「昔ね。なんか嫌な事でも思い出したのか？」
「それ、普通は聞かないわよ？」
「気になることは聞く主義ってのが私だからな」
自信満々な表情で言うことではないような気がするが、ま、魔理沙だから仕方ないか。
私は苦笑しながら口を開く。
「嫌な事って訳ではないわ。ただ、思い出したいと思っても思い出せないことがあるのよ」
「忘れたのか？」

「そうね……忘れてしまったんだと思うわ」
博麗神社の外側を見つめ、私は魔理沙の質問に答える。
場が静寂に包まれ、静かな時間が流れる。
私としてはしんみりとした空気にしたくはなかったが、口が勝手に動いていた。
たぶん、誰でもいいから聞いてほしかったのかもな～。
私って本当にメンタル弱いわ。
心の中であちゃあと思いながらも、なんとかこの場の空気を変えようと、口を開ける。

「ま、私の話は良いとして、魔理沙は霊夢と弾幕ごっこしないのかしら？」
「あ……」
完全にそのことを忘れていたのか。
口を大きく開けて固まる魔理沙。うん。可愛いわ。
「そ、そうだった。幽香、思い出させてくれて助かった。よし、じゃあ弾幕ごっこやろうぜ。霊夢！」
「なにが、よし！　よ。やらないって言ったじゃない」
「意固地だな。一回ぐらい良いじゃないか」
不満そうな顔で言う魔理沙に、霊夢は聞く耳もないというように、暢気に欠伸していた。
「はぁ……仕方ない、じゃあ幽香、私と弾幕ごっこしようぜ！」
気持ちの良い笑顔を私に見せて言う魔理沙に、私は少し悩む仕草をする。
いやさ、弾幕ごっこって当たったら痛いじゃん？　しかも、相手は魔理沙だから、火力抜群のスペルカード使ってくるし……正直やりたくない。
けど、あの笑顔を崩したくもない。
――ならやるしかないじゃないか。

「わかったわ。それなら、少し広いところに行きましょ」
「おっし、そうこなくちゃな！」
魔理沙は元気よく箒を振り回しながら広場へと向かう。
私はそれに後ろから続こうと立ち上がると、霊夢が声をかけてくる。
「あんまり派手に暴れないでよ？」
「私は抑えられるけど、魔理沙はわからないわよ？」
「なら伝えておいて。もし神社に傷をつけたらただじゃおかないってね」
「怖いわね。ちゃんと伝えておくわ」
霊夢の目がマジなのを理解した私は、表面上は余裕に答えていたが、内心ガクブルだよ。これは魔理沙にちゃんと伝えておかないとね。
冷や汗が背中に流れるのを感じながら歩こうとしたが、またしても霊夢に止められる。
「それと、遊びすぎてケガなんてかっこ悪いことにならないようにね」
頬を若干赤くして言う霊夢に、私はその場で鼻血を出さなかったことを誇るべきことだと思ったよ。
可愛すぎ。ツンデレ霊夢可愛すぎだよ。
「ふふ、気を付けておくわ」
私はこれ以上霊夢を見ると本当に鼻血が出そうになったため、もったいないが、顔を魔理沙が待つ広場に向け、私は霊夢に一言伝えて歩いた。

もう何も怖くない。

第二話・魔理沙と弾幕ごっこ（改稿版）

太陽の光をバックに、魔理沙は箒に跨って空に浮かぶ。
私はそれを確認し、日傘を広げて空を飛んだ。
すると、魔理沙がニヤニヤした顔で口を開く。
「霊夢が何か言ってたのか？」
「えぇ。神社に傷をつけたらただじゃおかないって言ってたわ」
クスリと私が笑いを零すと、魔理沙は苦い表情で答える。
「それ、笑い事じゃないだろ。弾幕ごっこ中にそんな配慮なんて出来る訳ないしな」
「大丈夫よ。神社には当たらないように弾幕を消してあげるわ」
「ほぉ？　それは私の弾幕を全て防げるって言っているのか？」
私のセリフに、魔理沙の表情は一気に不機嫌に。
いや、魔理沙の弾幕は決して楽に防げるわけじゃないんだ。私はただ、神社を気にせず弾幕ごっこしていいよって伝えたかっただけなんだ。
うう、言葉のチョイスをミスした……。
心の中は両手両膝を地面につきたい気持ちだよ。
「ま、幽香が相手だし、私もはなっから手加減なんてことする気はないからいいさ。全力で勝ってやる」
やっちまった、と落ち込んでいる私の心境を無視して、魔理沙は俄然やる気に満ち溢れ、私に指を突きつける。
「今回の決闘内でのスペルカードの使用回数は二回。それでいいな？」
「構わないわ」
「よし、なら、始めるぜ？」
魔理沙の言葉を皮切りに、美しくも危険なゲームが始まった。
「先手必勝！　油断大敵ってな!!」
先手を取った魔理沙は青色のミサイル型弾幕、マジックミサイルを周りに展開し、銃弾の様な速さで弾幕を飛ばす。ただ、ぼ～と見ていた私はあっという間に魔理沙の弾幕で私の視界は埋め尽くされる。

青色に光る弾幕は客観的視線で言えば綺麗に映るが、それが眼前まで迫りくれば話は別だ。
いや怖いから！
「せっかちは嫌われるわよ」
私は魔理沙のいきなりの攻撃に少し文句を言いながら、日傘を使って、神社に当たらないように弾幕を弾く。
神社の方向ではない弾幕は軽やかに、まるで踊り子の様なステップで次々と来る弾幕を避け続ける。
全ての弾幕を難なく躱す私に、魔理沙は口笛を吹く。
「ヒュ～～流石は幽香だな」
「ふふ、褒めても何も出ないわよ？」
「いやいや〝何も〟ってことはないだろ」
魔理沙の言葉を肯定するように、私はお返しの弾幕を張っていた。
弾幕の形は向日葵を模様したもの。
これは、私が花の中でも向日葵が好きだから、という理由もあるし、奇しくも〝風見幽香〟も同じように向日葵がお気に入りだったことから、弾幕の形をこれにした。
「今度は私の番ね」
「別にずっと私の番でも構わないけどな」
「あら、それだけじゃつまらないわ」
軽口を叩く私と魔理沙だが、どちらも油断も隙も見せない。
「花に埋もれなさい」
私はその言葉と同時に、向日葵型弾幕、フラワーショットを雨の如く空から下へと、魔理沙のいる方角に降らせる。
魔理沙はそれに焦りを見せるどころか、余裕の笑みを見せる。
「花には埋もれてみたいが、その〝花〟はお断りだぜ！　魔符〝スターダストレヴァリエ〟！」
魔理沙のスペルカード宣言がなされた瞬間、数え切れない程の星型の弾幕が周囲に出現し、景色が星で染まる。
色は赤や青、黄色や緑と様々な色で彩られ、正直見ていて目がチカチカするな。

それと、よく見るとその星型弾幕は全て連結し、一つの大きな星が形作られていた。
巨大な星型弾幕は恐るべき速さで私の放ったフラワーショットを飲み込み、徐々に迫り来る。
視界を覆う星の弾幕に、私は冷静に思った。
これヤバくね？
あんなの食らったらひとたまりもない。なら私もカードを切ろう。
「咲き誇りなさい。花符〝幻想郷の開花〟」
今まで私の眼前に迫り来ていた星型弾幕の周囲に、多くの花型弾幕が出現する。
一輪の白い花、儚くも凛々しき一輪草、自己主張の強い真っ赤な花、情熱の赤い薔薇（バラ）、様々な色を咲かせる、七変化の紫陽花（あじさい）、綺麗で美しく、可憐で華やかな花たちが弾幕という形で再現されていく。
それは魔理沙のスペルカード、魔符〝スターダストレヴァリエ〟を覆い、食い潰す勢いで咲き誇り、空に満開の花を咲かせた。
まさに幻想的な光景、淡く光る色とりどりの花の弾幕が星とぶつかり、散る様は、まるで儚くも力強く光る花火。
今が決闘をしているということを忘れてしまいそうな美しさだ。
「――よそ見厳禁だぜ？」
目の前の光景に目を奪われていた私の前方から、互いの弾幕を避け、一直線に突っ込んでくる魔理沙の姿が目に映る。
更に言えば、魔理沙の周りにはビーム型弾幕、イリュージョンレーザーが左右に展開され、私に向かって絶賛放出されていたりする。
頬に掠る魔理沙の弾幕に肝を冷やしながら、私は咄嗟に日傘で防ぎ、魔理沙のイリュージョンレーザーの射程から横にズレる。
この弾幕は真っすぐしか発射出来ないから、本来、避けるのはそこまで難しくはない。
だが、魔理沙の機動力が合わさると厄介この上ないものになる。
「ははっ！　遅いぜ幽香！」
その言葉通り、魔理沙は猛スピードで縦横無尽に駆け巡り、私の放つ弾幕は魔理沙の速さに追いつけず、むなしく空を切るばかり。

逆に、私は魔理沙の放つ弾幕を防ぐばかりと、一気に劣勢に立たされた。
やっぱり魔理沙のスピードは速い。私の飛行するスピードはお世辞にも早くはないから、どうしても後手に回ってしまう。
ま、だからと言ってずっと後手に回るのも面白くないよね。
私は向日葵型弾幕のスピードを減速させ、代わりに一つ一つの弾幕を大きくする。
「遅すぎて欠伸が出るな」
「言ってなさい」
小馬鹿にした魔理沙の言葉に、私は気にせず弾幕を張り続ける。
無心になって花の弾幕を放ち続け、数が徐々に増え始める。魔理沙はそれでも華麗な動きでそのすべての弾幕を避け続け、こちらに弾幕を飛ばしてくる余裕まであった。
それでも私はこの行動を変えない。その不可解な行動に不信を抱いたのか、魔理沙は一度止まり、周囲を見渡す。
「くそ、してやられたか」
周囲を見渡した後、大きく溜息を吐く魔理沙。
どうやら、私がやっていた事の意味を漸く気づいたみたいだね。
私の行動にはちゃんとした意味があった。勿論、何も考えずに弾幕を放っていた訳ではない。
第一、魔理沙に普通の弾幕を当てるのは困難だ。しかも、飛行能力が低い私は更に難しくなるのは自然なこと。
ならどうするか？
答えは簡単。
〝動きを封じ〟ればいいのさ。
どんなに機動力があろうと、避けるための〝場所〟がなければ意味がない。
私は魔理沙の行動を制限するために大きな弾幕をそこかしこに留めさせていた。これで魔理沙も迂闊に飛び回れなくなった。
やっと形勢逆転かな？
「さぁ、どうするのかしら？」

「どうするって？　そんなもの決まっているさ」
魔理沙そう言い、帽子を手に取って中をまさぐる。
あ、今すごい現実から目を背きたくなった。
私の現実逃避を他所に、魔理沙はある物を帽子から取り出した。
「パワーで押し切るのさ!!」
魔理沙は、八角柱の形をした小さな筒の様な物を私に見せつけるようにして言った。
あれはミニ八卦炉（はっけろう）と言われるマジックアイテム。
まぁザックリ説明すると、ミニ八卦炉に魔力を注げば注ぐほど火力は上がり、最大出力なら山一つ消し飛ばせる火力を有しているってこと。
こんなに幼い少女が持っていていい物じゃない。
全く、霖之助さんは心配性なんだから、いくら家出少女が心配だからってこんなとんでもないマジックアイテムを渡しちゃダメでしょ。
内心で文句を垂れながら、私は無駄な抵抗とも思えるが、魔理沙にマスパしないように遠回しに言ってみる。
「パワーだけなんて華がないわ」
「魔法は派手だからこそ華があるのさ……火力のない魔法は華がないぜ？　恋符〝マスタースパーク〟」
魔理沙はその言葉と同時にミニ八卦炉に魔力を注入し、白い光が急速に溢れ、次の瞬間、極太レーザーが放たれた。
交渉失敗。
うん。何言ってもそれ止められないってわかってた。
――はぁ、仕方ない。魔理沙がマスパをするなら、こちらも〝少し〟本気を出そうか。
眼前に迫る光の奔流に向け、私は傘を前に出す。
気負う事もない。
力む事もない。
ただ少し、妖力を開放する。
魔理沙……貴女は間違った選択をした。
私に〝力勝負〟をした時に、貴女の命運は決まってしまった。

「吹き飛びなさい」
私の言葉と同時に、日傘の先っぽから魔理沙のマスパと同種の光――元祖マスタースパーク――が放たれる。
大きな光の塊がぶつかり、大気が揺れる。
衝撃波だけで木々が弓の様にしなり、大地は地震でもあったかのように揺れる。
力と力のぶつかりは、一見拮抗しているように思えるが、そんな事はない。
何故なら、魔理沙は魔力を全開にして放出しているが、私は鼻歌を歌うぐらいに余裕を持っている。
力をセーブしているからね。
うっかり全力なんて出したら、魔理沙がこの世からいなくなっちゃうよ。
文字通りね。
「貴女のパワーはそんなもの？」
「うっせぇ！　まだまだこれからだ!!」
魔理沙は荒い口調で言い放ち、ほんの少し、魔理沙のマスパが私のマスパを押し返す。
あら？　意外に余力が残っていたみたいだ。
けど、それぐらいじゃ簡単に押し返せるよ？
私はまた少し妖力を開放し、押された光を戻す。
「ぐぬぬぬっ」
「ふふ、もう終わりかしら？」
そろそろ魔理沙の魔力も尽きる頃合いだろう。
ここで一気にいかせてもらう。
グッと日傘を持つ手に力を入れる。
「うわ!?　くそっ！　幽香の奴、余力残してやがったのか!?」
ドンドン押されていくことに危機感を覚えたのか。魔理沙の焦った声が聞こえる。
ふっふっふ、魔理沙にはいいように翻弄されたことだし、ここでちょっとしたお仕置きをしよう。

妖力を一瞬だけ八割ほど開放し、徐々に浸食するように魔理沙のマスパを押していた私のマスパが、刹那の時に魔理沙のマスパを飲み込む。
「なっ!?」
魔理沙の驚愕した声が私の耳に届く。
おっと、このままじゃ危ない。
私は意識的にマスパを放つ位置を変える。
極太レーザーは魔理沙の顔の横を通り過ぎていく。
ふぅ危なかった。あのままだったら私のマスパが魔理沙を飲み込んじゃうところだった。
溢れ出していた妖気を抑え、私は閉じていた日傘を開く。
「私の勝ちね?」
「……私の負けだ」
頬を膨らませて言う魔理沙に、私は微笑む。
いやぁよかったよかった、魔理沙のマスパを上手く拮抗させられて。
力の制御が得意じゃないから、魔理沙のマスパを上手く拮抗できるか、そこが心配だった。
ま、結果は魔理沙のマスパを良い具合に拮抗させられたから、その後ちょっとしたお仕置きができたしね。
満足満足!
「くそっ! 今日こそ幽香に勝てると思ったんだけどな」
「何度やっても私が勝つことは変わらないわ」
苦笑しながら私が言うと、魔理沙はムッとした顔をする。
「そんなこと、やってみないことにはわからないぜ?」
「そう思うなら、何度でも受けて立ってあげるわ」
「言ったな? よーし、何度でも勝負してやる」
ニヤッと笑みを作り、魔理沙は言う。
あ、藪蛇だった。
「勝負はついたことだし、一旦神社に戻りましょう」
「お、そうだな」

コロコロと表情を変える魔理沙を連れ、私達は霊夢が待っているだろう縁側へと飛んでいくと、霊夢は縁側でお茶を飲んでいた。
「霊夢、私にもお茶くれ」
「それぐらい自分で淹れなさいよ」
素気無く返され、口を尖らす魔理沙。
私はそれを見ながら自分でお茶を淹れようとすると、霊夢に止められる。
「いい、アンタのはもうそこに淹れてあるから」
「あら、淹れてくれたの？」
「偶々よ」
私に顔を見せないようにする霊夢に、私はにやけた顔しないように努める。
まぁ、そんなことしなくてもこの顔に限ってにやけるなんてことはしないだろうけど。
「ずりぃ～なんで私は駄目で幽香はいいんだよ～」
「うっさい。偶々だって言ってんでしょうが」
「絶対準備してたな」
「なにか言った？」
「いいえ～なーんも」
不貞腐れた魔理沙に、霊夢がギラッとした目で睨む。
おおう、嬉しいけど二人が喧嘩するところは見たくないよ。
「魔理沙、私がお茶を淹れるからそんな顔しないの」
「お、それならいいぜ？」
「なんで幽香が淹れるのよ……」
今度は霊夢が不貞腐れた顔をする。
え、これどうすればいいの!?
誰かこの二人を笑顔にする方法教えて！
若干現実逃避をしたくなる私は、取りあえず魔理沙のお茶を淹れるために、戦略的撤退をした。
ほとぼりが冷めるまで、居間でゆっくりしてよ。
縁側で言い合う二人の少女から、私は逃げる事しか出来なかった。

ヘタレと言うなかれ、これは必要なことなのだよ……。

第三話・寂しがり屋な花妖怪とわんぱくな氷の妖精

鬱蒼と生い茂る森の中、太陽の光さえもわずかしか地面を照らさない森林に、私はいる。
実を言うと、博麗神社から逃げてきたのだ。
あの二人の言い合いに巻き込まれないためと言いたいけど、それは言い訳で、二人の空間に私がいると、物凄い違和感を感じたんだ。
ほら、喧嘩するほど仲が良いとか言うけど、あの二人は正にその通りだなって思う。
だって、魔理沙と霊夢はお互い言い合いをしているのに、どちらもなんだかんだで楽しそうにしているんだもん。
あそこに私は入れない、そう感じた。
まぁ、霊夢と魔理沙ならそんなこと気にするなと言うかもしれないけどね。
そもそも、霊夢や魔理沙とは浅くない付き合いをしている。
霊夢は幼少の頃からちょくちょく私が会いに行っていたし、魔理沙は霊夢と一緒にいることが多かったから、話す事も少なくなかった。
だから、友人と言える間柄だと私は勝手に思っている。
でも、その友人と言える〝人〟というのは、いつか寿命を迎えるものだ。
私達妖怪と違うんだよ。
だからこそ、自分で線を引いてしまう。
仲良くするけど、心の奥底から慕い合うことが出来ない。私が臆病だから。
もしかしたら、こんな気持ちになるのは私が〝中途半端〟だからかな。
妖怪であるはずなのに、人の心がある半端者、どれだけ長く生きても、この心は変わらない。
親しい人が亡くなるのは悲しいものだ。
この前、霊夢が博麗の巫女になる前の時代にいた巫女、先代が忽然と幻想郷から消えた時も、心にぽっかりと穴が開いたような感覚に

陥った。
先代とはいつも喧嘩をしていたが、それでも、最後は笑っていた。
時には酒を飲みながら愚痴を聞いたりもしていたな。
楽しかった。嬉しかった。
幸せな気持ちになれた。
だけど、その分いなくなった後の喪失感は途轍もなかった。
あの感覚が怖いのだ。
いつも隣で笑っていた人が突然いなくなるというのは、どんなに経験しても決して慣れない。
それが数少ない友人ならば更に辛く感じる。
あぁ、距離を感じているのは霊夢達かも知れないな。
思わず私は苦笑いをする。
この世界に生まれ落ちてからというもの、いつも考えることがあるんだ。
なんで私は〝人間〟じゃなかったんだろうか？　と……。
こんな過ぎた力を持つ妖怪じゃなくて、非力な人間だったらと思った事は一度や二度ではない。
聞く人によっては、贅沢な悩みと思う者もいるだろう。
けど、私はそう思っている。
小さな村で家族と過ごし、時に怒られ、時に褒められ、そんなどこにでもある家庭を持ち、喧嘩したり、遊んだりする友人が何人もいて、最後は好きな人を見つけて死ぬまで一緒にいる。
そんな小さな幸せを噛み締める人生というのに、私は憧れている。
残念ながら私は妖怪で、一緒に暮らす人もいなければ結婚も出来ないし、一生を共にする者もいないけれどね。
はぁ……強い肉体を持ち、人からも妖怪からも恐れられる本当の私は、情けない一人の妖怪。
優に１０００年を超える年月を生きているというのに、我ながら女々しいかな。
あーあ、気分転換に博麗神社で霊夢に会いに行ったのに、結局落ち込んでちゃ意味ないわ。

日傘をさしながら、私は暗い気持ちで歩いていると、奥の方に小さな人影が見える。
あれ？　こんな森の奥深くに人？　それも子供？
森に子供が迷い込んだのかと思いそっと近づいて行くと、子供特有の高い声が耳に届く。
「あたいと鬼ごっこする奴この指と～まれ！」
「やるやる!!」
「はいはーい！」
楽しそうな声を出しているのは〝妖精達〟だった。
見た目は掌サイズから大きいもので１０歳ほどの身長を持っていて、羽を持っている事が特徴だろうか。
もう一つ特徴があるとしたら、それは自然から発生する妖精達は自然が維持されるなら不滅だということ。
彼女達は頭を吹き飛ばされても、一週間もしない内に復活する。
因みに、そういうとき彼女達は「一回休み」と言うらしい。
死という恐怖をあまり感じない彼女達らしい言葉だね。
クスっと笑い声が出てしまう。
「む！　そこにいるのは誰だい！」
「え？　なになに～？」
「なになに～？」
ありゃ、そ～っと近づいていたのにバレちゃったか。
私は苦笑しながら、元気の良い妖精達の前に出る。
「ひっ！」
「あ、ああ、あの方は……!?」
「アンタ達、なにをそんなに怖がってんの？」
三匹の妖精の内二匹は怖がり、残りの一匹は首を傾げる。
私を怖がらない妖精は私もよく知る妖精だった。
この世界に来てから見た事はあったが、話したことはない原作キャラ。
湖の近くによく出没する氷の妖精チルノ。
見た目は十歳未満の幼い容姿で、薄い青色の髪に瞳、髪はウェーブ

がかかっていて肩に掛かる程度。髪には大きな青いリボンが付けられていて大変可愛らしい。
背中には六枚の氷の様な羽を持ち、幼い見た目に合う青いワンピースを着ている。
チルノが私を怖がらないのは素直に嬉しいよ。他の妖精はあれだけど……。
私は、怖がる妖精達に心を抉られながらも、何とか声を掛ける。
「こんにちは、かしら？」
「た、たた、たすたすけ……!?」
「……終わった」
ぜっんぜん話が出来ねぇ!?
おっと、思わず口調が荒くなってしまった。
でもさ？　ここまで怖がられる身にもなってよ。悲しくて内心では滝のように号泣をしているからね、私！
「なんか知らないけど、あたいの仲間を怖がらせるのは、あたいが許さない！」
「カッコいいチルノ！」
「さすチル！」
知らない内にあちらさんは盛り上がっているようだ。
誰でもいいから私の言葉に耳を傾けてよ。
遠い目になりそうな私に、チルノは得意げな顔をする。
「あたいの最強の一撃をくらえ！　氷符〝アイシクルフォール〟！」
人の頭程の氷の塊が大量に出現し、まるで滝の様に私に降り注ぐ。
これを避けるのは骨が折れるが、私は知っている。
このスペルカードの弱点を。
「なん……だと!?」
驚愕の声を上げたのはチルノ。
何故なら、私が涼しい顔でチルノの真正面にいるからだ。
実を言うと、このスペルカードはチルノの正面近くが安全地帯だったりする。
このチルノの扱うスペルカード、氷符〝アイシクルフォール〟は、

チルノの正面且つ近場にいると、攻撃を一切くらわないように出来ているんだ。
まぁ、これはゲームの中の話しで、しかもｅａｓｙモードしかない弱点だけどね。
「いきなり襲い掛かってくるなんて、酷いじゃない」
そう言って、私はチルノの鼻を摘まむ。
「むぐぐ」
「氷を止めなさい。近くの妖精が寒そうにしているわよ？」
チルノは、私の言葉を聞くと、近くで自分を応援していた妖精が抱きしめ合いながらガクガク震えている所を見て、一瞬で氷を出すのを止めた。
「良い子ね」
「ふん！　あたいは超絶優しいからね！」
無駄に偉そうに腕を組みながら言う目の前の幼女に、私は苦笑を零す。
優しいと言うなら、いきなり攻撃はやめてほしいよ。
「チルノが負けた……」
「やっぱり風見幽香は化け物だ！」
明らかに寒さが原因じゃない震えに、私は人知れず涙を零す。
まぁ泣いてないけど。
私が感傷に浸っていると、チルノ以外の妖精が慌てた様子で空に飛び立つ。
「チルノ、君の事は忘れない！」
「達者で！」
「え？　ま、待ってよ！」
チルノの伸ばした手の先には、もう誰もいない。
先程の妖精達は、私を怖がっていなくなってしまった。
完全に原因は私だよね？　これ……。
気まずくなる空気に、私はそろりとチルノの顔を見ると、涙を流さないように堪えている少女がそこにいた。
うわあぁあああ!?　どう、どうしよう!?

内心で大慌てな私だが、表面上は何も変わらない冷たい印象で、私はチルノを見る。
なにか気の利いた言葉があればいいけど、こういった子供に対して元気が出る言葉とかわからない。
いったいどうすればいいんだ！
「やっぱり〝今日も〟こうなった」
内心であたふたしてた私に、チルノはポツリと言葉を零す。
今日も？　もしかしてこういった事は初めてじゃない？
でもなんでだろ？　さっきまで仲良さそうだったのに。
「いつも？」
「そう。あたいとの遊びは最後まで続いたことなんてない。あたいの周りが寒いから……」
そういうことか。
氷の妖精であるチルノの周りの空気は確かに冷たい。他の妖精達には少し厳しい寒さだ。
だから、チルノの周りから妖精達はいなくなってしまうのかも。
別にチルノの事が嫌いという訳ではないのだろうけど、寒くてずっと一緒にはいられないんだろうね。
まぁ今回は全面的に私が悪いんだけど……。
「私は気にならないわ」
「あたいの寒さに耐えられるの？」
「暑くても寒くても私には関係ないもの」
実際、チルノの周りは冷たいが、凍えるほどでもない。
七月の末あたりだから、気温が温かいというのもあるのかも知れないけど、元々私の体は丈夫だからね。チルノの周りに感じる冷たさなんてちょっと涼しいなと思う程度だ。
「ホントに!?」
「そんな下らない事で嘘を吐く意味がないわよ」
「じゃあじゃあこうしても？」
チルノが私の腕に抱きついてくる。
うひゃあ、ヒンヤリしつつも子供特有の柔らかさがして気持ちい

い―！　流石は氷の小さな妖精だ。
「冷たくて気持ちいいわね」
「おぉ―！　あたいのヒンヤリ攻撃が効かないなんて、ホントに丈夫だね」
　驚いた表情を作るチルノは、そのままくっついた状態で話す。
「なぁなぁ、なんでアンタは皆に怖がられてるの？」
　チルノの言葉は、本当にわからないといった困惑した顔をしている。
　それはたぶん、私の〝力〟を見たことがなくて〝噂〟を聞いたことがないから言えるのかもね。
　今まで、圧倒的なまでの力を持つこの身体で、私は降りかかる火の粉は振り払ってきた。
　それは生まれた時からずっとだ。
　最初こそ理不尽なまでの弱肉強食の環境に心がやさぐれて、まぁその、暴れ回ることはあった。
　その時、周りに甚大な被害を与えてしまったし、悪名も轟いてしまった。
　今思えば、どうしてあの時の私はあんなことをしてしまったのかと、後悔しかない。
「さぁ、わからないわ」
　だから、せめてチルノだけはなにも知らず、素の私を見てくれる存在でいてほしい。
　もう妖精に逃げられるのは辛いです……。
　という訳で、努めて冷静な顔で白を切る。
　私の答えにチルノは大きく首を傾げる。
「う～～～ん？」
「気にしなくてもいいじゃない。自分の目で見たことを信じなさい」
「なるほど！　ならあたいは怖がられているアンタに怖がっていないから最強って訳ね！」
　納得、といった顔をして頷くチルノに、私は自然と笑みが浮かぶ。
「あ、そういえば、アンタってなんの妖怪なの？」

「花の妖怪よ」
「花？」
首を捻るチルノに、私はわかりやすく能力を使ってみせることにした。
近くの萎びれた花を見つけ、手を翳して能力を行使する。
すると、萎んでいた花は徐々に元気になり、色褪せていた色も鮮明な色となり、空を仰ぎ見るように花は咲き誇る。
「わぁー！」
キラキラした瞳でその現象を見ていたチルノは、花に近づき、花びらを突っつく。
その行動がホントに子供にしか見えなくて、何というか、微笑ましいね。
思わず心がほっこりしていると、チルノがこちらに顔を向ける。
「萎んでたのに、元気になったよ！」
「そうね」
いつまでも楽しそうに花を見つめるチルノに、私は和んでいると、チルノが突然こちらに顔を向ける。
「あ、あたいだってすっごいんだからね！　アンタの能力よりあたいの能力のがメチャクチャすごいんだから！」
「ふふっじゃあ見せてくれる？」
「ふふん！　泣いて悔しがっても知らないよ！」
いやぁ可愛いね。
得意げな顔で胸を反らすチルノは、近くの湖に飛んでいくと、何か手に持って帰ってきた。
「こいつを一瞬で凍らせるのが、あたいの特技」
そう言って手に持っているモノを見せてもらう。
「カエル……」
「そう！　あたいの遊び道具！」
ババーンっとチルノの背中から効果音が聞こえてきそうな感じがする。
いやそれにしても、カエルも気の毒だな。いつも凍らせられている

のか。
少しカエルに同情する私を他所に、チルノはカエルを地面に置く。
「ほいっ！」
チルノの気の抜けた声が出ると、カエルが一瞬にして凍る。
それはもう芸術的なまでに綺麗に固まっている。
哀れカエル、君の事は忘れ……るかも知れない。
心の中で手を合わせていると、チルノは私の手を引く。
「こっち来て！」
言われるままに手を引かれた場所は、湖。
綺麗な湖なのか、水面が透き通っている。チルノの住処かな？
「湖じゃなくてあたいの方を見てよ！」
湖に見惚れていると、チルノの不満そうな声が掛かる。
「なにをするのかしら？」
取り合えずチルノが何をしているのか聞くと、彼女は待ってましたと言わんばかりの顔で答える。
「この凍ったカエルを、こう水に入れると、生き返るんだよ！」
手に持つカエルを無造作に水に落としてから数分待つと、チルノの言う通り、カエルが再び動き始めた。
生き残れてよかったな、カエル君。
カエルの無事に密かに安堵する私に、チルノは驚いたと思ったのか、またカエルを捕まえて凍らせた。
「ゲッ……コ……」
掠れるようなカエルの鳴き声に、私は妖精の無垢さって時に残酷だな、とふか～く思ったわ。
無邪気にカエルを凍らせては解凍させて遊ぶチルノを見て、改めて妖精の無垢さに若干引いていると、
「あっ！」
という声が上がる。
どうしたのかと思い、わたしはチルノを方を見る。
……カエルが見事に二つに割れてる。
なるほど、失敗したのか。

カエルーーーーー!!!!
心の中で全力で叫ぶ私とは違い、チルノはあちゃあと困った顔をする。
「失敗しちゃった。あたいの氷に耐えられないなんて、だめだめね」
チルノはやれやれと肩を落とし顔を横に振る。
カエルよ、せめて、安らかに眠ってくれ……。
真っ二つになっているカエルに、私は心の中で南無、と手を合わせていると、森にいる動物たちが怖がっているのか、騒がしく鳴いているのが耳に届く。
ただ事じゃない事態に、私は空を見て目を見開く。
「紅い、空……?」
口に出したのはチルノ。
いつも元気いっぱいの彼女も、流石にこの異常事態には驚いている。
なるほど、もうそんな〝時期〟なんだ。
私は知らず顔を笑みに形作る。
遂に、原作のストーリーが始まる。
紅霧異変。
紅い霧で幻想郷を覆い尽くす異変だ。
霊夢と魔理沙、二人の〝主人公〟が異変解決に向かう筈。
いったいどっちが先に異変を解決するのだろうか……。